水戸殉難者恩光碑保存会　会報

知恩

第十号

茨城県水戸市八幡町11－69
祇園寺境内　恩光無辺の碑
平成23年3月11日、東日本大震災により被災、損傷する
平成23年9月被災修復　復旧する

平成23年9月24日
水戸藩国事殉難者慰霊法要を挙行
恩光無辺の碑・碑前式典において
祇園寺　小原宜弘住職　読経

本日、茲に、水戸藩諸生党殉難者慰霊法要を挙行するに当たり、ご来賓の皆様ご列席のもと、子孫関係者一同、碑前に会し、謹んで殉難諸士のご冥福をお祈り申し上げます。

「明治戊辰　徳川宗家の衰廃を悲しみ　慷慨難に赴く者　水戸藩士中数百人を下らず　皇恩洪大　宗家の後に録す　遺霊また以て瞑すべし　茲に其の姓名を挙げ　碑背に録す也」

幕末維新の激動期に、国の行く末を憂い、国事に奔走しながら、一途に尊皇敬幕に走り、不慮の死を遂げ、屍を各地の山野にさらし、多くの有為の人材が散華された事は、誠に残念の極みであります。党派を別にし、其の主義は異なるも、君に対する忠誠心に於いては少しも異なる所は無いと、室田義文翁のお言葉の通り、私達も信ずるものであります。

本日、ここに、往事を偲び、改めて、尊皇敬幕、報恩士道のもとに各地に散華した人々に思いを致し、この先祖代々の地・水戸に於いて、子孫一同、碑前に会して、鎮魂慰霊の誠を捧げるものであります。なお、幕末騒乱に際し、不幸にして散華した人々の偉業に光をあて、顕彰し、この歴史の真実を風化させることなく、末長く後世に伝える所存であります。事、志と異なると雖も、心安らかならんことをお祈り申し上げます。

平成23年9月24日

水戸殉難者恩光碑保存会
会長　川上有文

碑文の大意

慶応3年10月14日、最後の将軍・徳川慶喜公は大政奉還した。翌年、慶応4年「戊辰」1月に、薩長藩の策謀・挑発により、旧幕府は薩長藩と鳥羽伏見の戦争となり旧幕府軍は敗北、徳川慶喜公は朝敵とされた。慶応4年4月に江戸城を開城し、旧幕府は崩壊、慶喜公は謹慎し、徳川本家は存亡の淵にあった。

徳川御三家として本家を支援する立場にある水戸藩は、徳川本家の衰退を悲しみ、又、薩長藩の策謀に憤激、数百人の諸生派藩士がこの難局に立ち向かった。東北越列藩同盟の一翼を担い、会津軍とともに、薩長軍と戦ったが戦局利あらず、多くの藩士が北越、会津、各地の戦場にて戦没した。最終的には、西軍・薩長藩の勝利、東軍・会津藩の敗戦となり会津戊辰戦争は終結した。

戦国の習い、徳川本家は滅ぼされる所、天皇の至高の温情により徳川本家は存続を許された。有難い極みである。殉難諸士も安心されたい。

又、どのようにしてこの難局に赴き殉難した人達を供養すべきであろうか。それは殉難諸士の姓名を挙げ、この恩光無辺碑の裏面に記録して、水戸藩国事殉難志士としてその冥福を祈り、供養することである。故にこの碑を建立したのである。

（川上）

明治改元は慶応4年戊辰9月

水戸藩諸生派国事殉難者　慰霊供養の経過

2011年（平成23年）9月・記
水戸殉難者恩光碑保存会

1　1864年（元治元年）　3月　尊皇攘夷激派・筑波山挙兵「天狗党の乱」
2　1864年（元治元年）　5月　弘道館諸生尊攘激派鎮圧のため決起し、「諸生党建言書」を水戸藩主・徳川慶篤公に上程する
諸生建言書　（水戸藩士、後の東京大学教授・内藤弥太夫・耻叟の起草）
3　1865年（慶応元年）　2月　天狗党・西上勢「尊皇攘夷派激派」・敦賀にて壊滅
4　1868年（明治元年）10月　水戸藩諸生派壊滅「八日市場の戦い」
千葉県匝瑳市八日市場中台の地が水戸藩諸生派（市川勢）終焉の地となる
5　1884年（明治17年）慷慨淋漓の碑・建立　（水戸市、神応寺）（拓本のみ現存）
篆額・前会津藩主　松平容保公、　撰文・東京大学教授　南波綱記
6　1934年（昭和9年）　恩光無辺の碑・建立　　茨城県水戸市八幡町11-69　祇園寺境内
7　1934年（昭和9年）　恩光無辺の碑・碑文　　篆額・室田義文　、撰文・朝比奈知泉
● 1934年（昭和9年）　水戸殉難志士恩光碑保存会を創立する　（諸生派子孫、趣旨賛同者））
8　1935年（昭和10年）「恩光無辺碑」除幕式 を執行　（祇園寺）
（室田義文翁ほか　諸生派遺族　参列）
9　1936年（昭和11年）9月23日　水戸藩国事殉難者慰霊祭を執行　（祇園寺）にて第1回慰霊祭
水戸市　祇園寺　恩光無辺碑前において、田中光顕・前宮内大臣外、随員　、及び県知事、水戸市長、水戸警察署長　参列、遺族も参列し法要執行される
10　2004年（平成16年）9月23日　水戸藩国事殉難者慰霊法要を執行　（祇園寺）（慰霊祭復活）
恩光無辺碑・建碑後70年を記念して慰霊祭実行委員会を組織し、70年の空白を埋め終戦後、初めて法要を執行する
● 2006年（平成18年）水戸殉難者恩光碑保存会を設立する　（諸生派子孫、趣旨賛同者）
11　2007年（平成19年）9月22日　水戸藩国事殉難者慰霊法要を執行　（祇園寺）　（本会主催第1回）
水戸市　祇園寺「恩光無辺碑」前において法要を執行する
12　2008年（平成20年）10月6日　水戸藩国事殉難者慰霊法要を執行　（八日市場）（本会主催第2回）
千葉県匝瑳市八日市場・水戸藩諸生派終焉の地に建立された「戦死者25人之墓」墓前に於いて法要を執行する
13　2009年（平成21年）9月22日　水戸藩国事殉難者慰霊法要を執行　（祇園寺）　（本会主催第3回）
14　2010年（平成22年）10月27日　水戸藩国事殉難者慰霊法要を執行　（会津）　（本会主催第4回）
会津若松市飯盛山　白虎隊記念館敷地内に建立された（水戸藩諸生党鎮魂碑）前において法要執行　（建碑１０周年記念法要）
15　2011年（平成23年）9月24日　水戸藩国事殉難者慰霊法要を執行　（祇園寺）　（本会主催第5回）
16　2012年（平成24年）　水戸藩戊辰戦争戦没者慰霊旅行を予定　（新潟県）

そのほか

●	1869年（明治2年）	戦死２５人之墓	建立	千葉県八日市場・諸生党壊滅の地
●	1888年（明治21年）	同上・２１回忌	法要	八日市場・墓前法要
●	1968年（昭和43年）	同上・１００回忌	法要	八日市場・墓前法要
●	1888年（明治21年）	戦死者供養塔	建立	栃木県片府田・宝寿院境内
●	1931年（昭和6年）	長岡原殉難者供養忠魂之碑	建立	水戸市、蓮乗寺境内に移転
●	1931年（昭和6年）	殉難者供養塔	建立	水戸市、赤沼獄舎跡
●	1989年（平成元年）	戊辰戦争当地戦没者供養塔	建立	新潟県西山町灰爪の丘
●	1994年（平成6年）	恩光無辺碑域整備　由来碑	建立	水戸市、祇園寺境内
●	2000年（平成12年）	水戸藩諸生党鎮魂碑	建立	会津若松白虎隊記念館敷地内

水戸藩国事殉難者慰霊法要挙行の報告

法要実行委員会
常任理事　岡見円礼

▼（2011年）平成23年9月24日
水戸藩諸生派殉難者の慰霊供養行事を挙行致しました。当日は、ご来賓の皆様のご列席のもと、諸生派子孫及び関係者一同、恩光無辺の碑の前に参列の上、厳かに慰霊の式典を挙げました。

▼式典次第は別紙に記載の通りであります。

▼式典終了後、本堂前庭において、記念写真を撮影し、その後、大広間において、第2部「直会」懇親の会を行いました。

▼水戸市教育長・鯨岡武様よりご挨拶を頂きました。続いて、水戸市議会議長・渡辺政明様、市議会議員・高橋丈夫様からも、心温まるご挨拶を頂きました。

又、お互いに、往時を偲び懇親と交流の有意義なひと時を過ごしました。

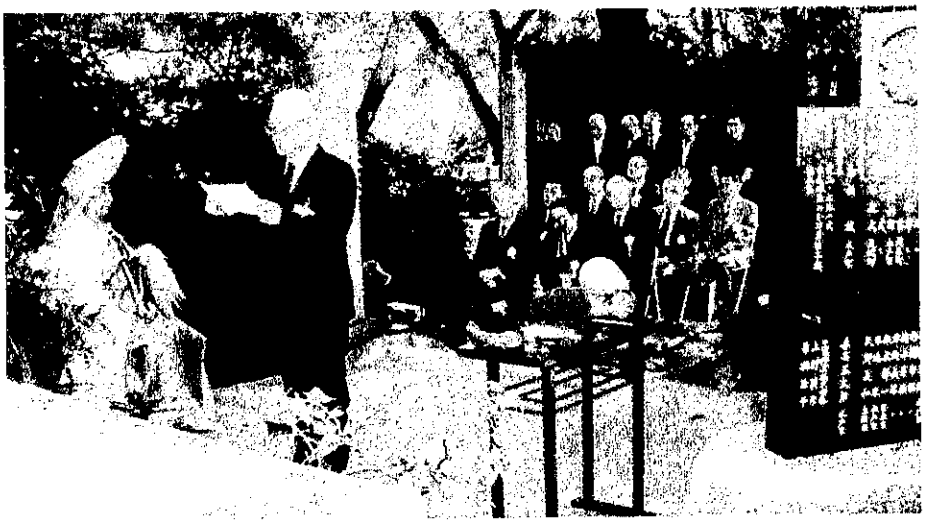
▼皆様には、当日は、お忙しいところ、又、遠路の所、ご参列を頂き厚くお礼申し上げます。

泉下の殉難者も喜んでいるものと思います。

▼又ご事情により、法要に参加されなかった方々のご先祖様も共に慰霊供養しましたことをご報告致します。

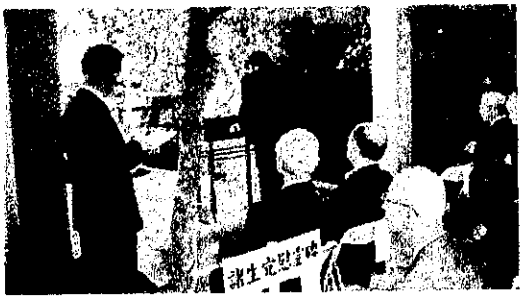
小原住職読経
碑前式典、参列の皆様

「写真撮影は
常任理事・朝比奈泰紀」



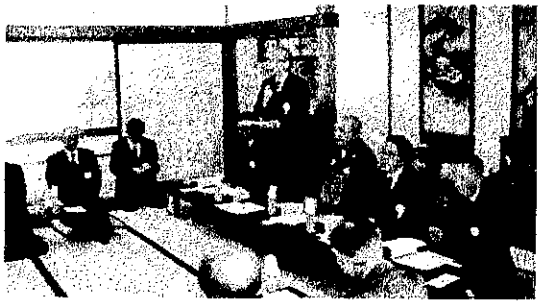
川上有文会長　追悼文を読む

式典会場



焼香　参拝

第2部　直会・懇親。交流会
教育長　鯨岡武様のご挨拶



水戸市議会議長　渡辺政明様のご挨拶

水戸市議会議員　高橋丈夫様
ご挨拶

参会者の皆様

水戸市教育委員会
教育長　鯨岡　武様より
ご挨拶をいただきました。

本日は、水戸藩国事殉難者の方々のご法要にお招きをいただき、誠に恐縮でございます。幕末・維新期における殉難者の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

本日は高橋市長が所用により出席できませんので、代りまして、一言ご挨拶させていただきます。

幕末・維新期における水戸藩では、藩を2分する戦いにより、数多くの尊い人命が失われました。その後、明治維新により、一方の側に厚い評価が与えられなど、人々の間に様々なわだかまりを残すこととなってしまいました。

私どもといたしましては、今日の水戸市が、幕末・維新という時代に、わが国の行く末を真剣に憂い、行動した、数多くの殉難者の方々の大きな犠牲の上に成り立っているものと認識し、こうした悲しく、痛ましい歴史上の出来事を様々な史実の中から正しく後世に伝えていく姿勢が大切であると考えております。

昨年度には、会津での慰霊祭に参加させていただき、故郷を思いながら、会津の地で倒れた諸生党の方々の胸中はいかばかりであったかと、思いめぐらせながらお参りをさせていただきました。

また、先の東日本大震災によって、こちらの水戸殉難者恩光碑も被災し、ささやかながら支援をさせていただきました。今後とも、この恩光碑を守り伝えていくと同時に、各地の慰霊碑や資料の検証などを通し、悲惨な戦いの歴史の中で近代化を迎えた郷土水戸の先人達を偲び、深く胸に刻み、歴史上の事実を正しく伝えていくことについて、最大限努力をしてまいります。

簡単ではございますが、以上でご挨拶とさせていただきます。

平成二十三年九月二十四日

続いて
水戸市議会議長　渡辺政明様
より、又
水戸市議会議員　高橋丈夫様
より、
同趣意の心温まるご挨拶を頂きました。

本年・平成23年(2011)は、明治元年(1868)より143年の歳月が経過しました。明治維新以降、水戸藩幕末史の片隅に無視同然の状態にあった泉下の水戸藩国事殉難者もさぞかし喜んでいるものと思います。(川上)

水戸藩国事殉難者慰霊法要　次第

水戸殉難者恩光碑保存会
法要実行委員会

曽洞宗壽昌山祇園寺
水戸市八幡町１１－６９

2011年(平成23年)9月24日

司会　岡見円礼委員

第1部　法要式典　恩光無辺碑前にて挙式　（敬称略）

正午　開式　岡見委員

PM12:01	1	読経	小原宜弘	祇園寺・住職	
	2	追悼の辞	川上有文	水戸殉難者恩光碑保存会　会長	
	3	焼香参拝			
			野澤　汎	々・顧問	
			川上有文	々・会長	
			前澤瑞穂	々・副会長	
	4	来賓			
		焼香参拝	高橋　靖	水戸市	市長（代理・教育長）
			渡辺政明	水戸市議会	議長
			鯨岡　武	水戸市教育委員会	教育長
			高橋丈夫	水戸市議会	議員
			中里誠志郎	水戸市教育委員会	文化課長
			室伏　勇	幕末維新水戸有志を偲ぶ会	会長
			川上　清	幕末維新水戸有志を偲ぶ会	事務局長
			小浜一男	日立歴史研究会	会長
			阿久津俊男	恩光碑・碑域整備尽力者	
			工藤昭宏	々	
	5				
		焼香参拝	会員	参列者	
PM12:30	閉式	碑前式典	終了		

本堂前庭　において記念写真撮影

記念写真　撮影後客殿大広間へ移動ください

第2部　直会　客殿大広間において

	司会	岡見委員		
PM1:00	1	開会		
	2	会長挨拶	川上有文	会長
	3	来賓挨拶	高橋　靖	水戸市長（市長代理として教育長　ご挨拶）
	4	々	渡辺政明	水戸市議会議長
	5	々	鯨岡　武	水戸市教育長
	6	々	高橋丈夫	水戸市議会議員
	7	来賓紹介	司会者	
	8	会食		
	9	懇談交流		
	休憩			
	10	講話	桜田門外の変について	
		講師	野澤　汎	本会顧問
	閉会			
PM3:00	全終了	岡見委員		
	散会			

平成23年9月24日法要参列の皆様

◆来賓

水戸市長　高橋　靖様
「市長の代理・教育長様参列」
水戸市議会
議長　渡辺政明様
議員　高橋丈夫様
水戸市教育委員会
教育長　鯨岡　武様
文化課長　中里誠志郎様
川口武彦様
海老沢里枝様
幕末維新水戸有志を偲ぶ会
会長　室伏　勇様
理事　川上　清様
日立歴史研究会
会長　小浜一男様
恩光無辺碑整備尽力者
阿久津俊男様
工藤昭宏様
祇園寺住職　小原宜弘様と副住職

◆水戸殉難者恩光碑保存会

会員　川上有文
〃　前澤瑞穂
〃　綿引周一
〃　朝比奈泰紀
〃　岡見円礼
〃　綿引正明
〃　野澤　汎
〃　平戸吉衛
〃　一澤勝男
〃　野田　稔
〃　田口　寛
〃　大森信男
〃　宇留野光
〃　今橋知江
〃　市川達也
〃　川和仁一
〃　遠西輝夫
〃　深谷益美
〃　佐藤万里子
〃　川上京子
〃　岡見京子
〃　塩沢美奈子

実行委員
岡見委員
川上委員
前澤委員
綿引委員

平成23年9月24日法要参列記念

平成23年9月24日

水戸藩国事殉難者慰霊法要参列記念

恩光無辺碑　碑前式典

碑前　式典会場の皆様

焼香　参拝

碑前　式典会場の皆様

鯨岡武教育長様　挨拶

前澤瑞穂副会長　挨拶

野澤　汎顧問　講話

直会・会場の皆様

御礼・ご挨拶

本日は、ご多忙中のところ、「諸生殉難者の慰霊法要」にご臨席をいただきまして有り難うございます。

水戸市からは教育長さん、市議会議長さんをはじめ、多くの方々にご臨席を頂き、更に、郷土史研究の方々のご臨席を頂き、従来に増して、心温まる法要が出来ました事を感謝申し上げます。

皆様もご存知のとおり、3月11日、東北関東大地震が発生し、各地共に、甚大な被害を蒙り、大変な事態になっています。

水戸市内の歴史的遺産も被災し、同様に、「恩光無辺碑」も被災損傷し、余震による碑の倒壊を、大変心配していました。

この恩光無辺碑の復旧につきまして、水戸市当局また市議会をはじめ、多くの方々のご協力、ご支援によりまして、修復工事も法要前に完了し、倒壊の心配も無くなり、碑前の法要ができました事を心から感謝申し上げます。

諸生派諸士の尊皇敬幕、報恩士道の信念、それを純粋に貫き殉じた先人達を偲び、皆様のご協力によって、より深い鎮魂慰霊の行事ができましたことを、重ねて感謝申し上げます。そして、必ずや、これからも、多くの人々の共感を得るものと、信じています。

諸生派につきましては、歴史上、残念ながら評価されず、長い間、歴史の闇の中に、埋もれていましたが、少しずつ、歴史の表舞台で往時が偲ばれ、水戸藩諸生党の存在が多くの方々に認識されつつあるのではないかと思います。

本会としては、その輪が、更に広がることを念願して止みません。

本会としては、この由緒ある史跡の「恩光無辺の碑」を守り、水戸藩諸生党殉難者を慰霊供養する行事を通して、水戸藩幕末史の歴史の真実を消すことなく、後世に伝えて参る所存であります。

どうぞ、これからも、宜しく、ご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

ありがとうございました。

平成23年9月24日

水戸殉難者恩光碑保存会
会長　川上有文

◆史跡指定申請書提出

平成23年10月7日、川上会長は鯨岡武教育委員会教育長に、恩光無辺の碑が史跡に指定されるよう申請書を手渡しました。その席に、高橋丈夫市議会議員、中里誠志郎教育委員会文化課長、小生・岡見円礼が同席しました。要望書は次の通りです。

平成二十三年十月七日

水戸市教育委員会教育長様

水戸殉難者恩光碑保存会会長
川上有文

恩光無辺碑の史跡指定について

上記のこと下記の理由により、水戸市の史跡に指定していただきたく、ご検討をお願い申し上げます。

記

一、理由（指定の理由　碑の価値）

歴史は後世の子孫がその歴史を鏡として正しく生きるために、その時の政治に左右されることなく正しく記されなくてはなりません。かつ私たちが現在平和に暮らせるのは幕末の激動期、天狗・諸生両派関係者の犠牲の上にあるのですから、歴史上の事実は、史実としてありのまま認め、これからはそれを乗り越えて、前向きに郷土水戸のために少しでもお役に立てるように平等に記録に残すべきであろうと思います。

恩光無辺碑は、数少ない諸生党の記録の中で第一級の物です。設立に当たったのは天狗党の生き残り室田義文翁で篆額「てんがく」を書きました。文章は諸生党の子孫で操觚界（新聞界）の三壁の一人といわれた朝比奈知泉です。

恩光無辺碑は、諸生派殉難者・数百人の御霊「みたま」のより所であり、象徴的存在であり、天狗・諸生両派関係者の和解の象徴です。

故に「恩光無辺碑の史跡指定」を心から希求致します。

二、恩光無辺碑について

①所在地…略…

②碑文　…略…

③背面　諸生党の名前あり

④平成六年改修時付加された物
…略…

⑤恩光無辺碑が建てられるまでの経過　…略…

ほかに、関連する資料をまとめて、申請書に添付しました。

さて、インターネットで水戸市の史跡一覧表を開いて見ると、尊皇攘夷派天狗党関係の物ばかりです。諸生派関係の史跡は一つもありません。では、史跡指定の選定基準は、どうなっているのでしょうか。

平成21年6月17日、水戸市議会の一般質問で高橋丈夫議員の質問に対して、内田秀康教育次長は「教育行政としては、いずれに偏ることなく……略……事実をきちんと伝えていくことについて、さらに一層努力してまいります」と答えられました。教育委員会の努力を注目していきましょう。

常任理事　岡見円礼

茨城県歴史館の
昨年の歴史教室より
幕末水藩党争史を三つの記録に読む

歴史館　桜井　明

周知のように、「甲辰の国難（1844）から「戊午の蜜勅（1858）」「元治甲子事件（1864）」を経て、「戊辰戦争（1868）」にいたる20数年間、水戸藩では、熾烈な内部抗争が展開されました。名前が分かっているだけでも3000人にも及ぶ殉難者を数えたこの党争の記録は数多く残されていますが、そのほとんどが、最終的勝利者側（「天狗党」）の立場に立って書かれたものです。

今回の歴史教室では、明治期に水戸藩関係者によって比較的公正な立場から叙述された三つの記録

1「水戸藩党争始末」
2「天保明治水戸見聞実記」
3「故老実録水戸史談」を紹介し、この記録から水戸藩内党争の悲劇の一側面をたどってみたいと思います。

▼これは昨年の歴史教室の募集案内でした。

▼私「川上」は、頂いた史料の中で、特に注目すべき点として次の3点を指摘したいと思います。

その1は、8頁上段参考史料②「桜田の事件に対する水戸の藩論は如何なりしや」？

最初より勅書不返論者はこの挙を快とし金子、高橋を尽忠報国の義士と称するが、老公「前藩主斉昭公」の意を遵奉する勅書返納論者は皆之を非難し、君国（水戸藩）を危うくするものである。と切論せり。

★史館総裁・国友与五郎の、桜田事件について痛烈な批判の存意書がある。「別紙史料参照」

▼要点は次の通り」

◎勅書不返論者（尊皇攘夷激派）は、水戸藩主・慶篤公、前藩主「老公」・斉昭公の「勅書は返納せよ」との藩の命令を拒絶し、長岡宿に集まり実力を以って勅書返納を妨害、老公激怒、長岡勢追討を令せり。参政・渡辺半介、弘道館諸生を率い出陣する。その前に、長岡勢解散し、隠密に江戸に潜入、3月3日井伊大老（その時の総理大臣）暗殺事件を起こす。

▼勅書（戊午の蜜勅）を幕府へ返納できない場合は、水戸藩は藩の浮沈存亡にかかわる非常の事態にあった。又

▼桜田事件後、将軍家茂公は水戸藩を討伐すべしと言明し、幕府は大変な状況にあったが、会津公の尽力により事無きを得たと言われている。

▼水戸藩主とご老公のご命令を拒絶し、暴走して水戸藩「君国」を存亡の危機に陥した尊皇攘夷激派の臣下をどう思うべきでしょうか。

▼尊攘激派は忠義の臣でしょうか？現在、尊皇攘夷激派の人々は「神」として祀られている。

その2は、8頁下段「参考資料④」元治元年（1864）、朝比奈、佐藤、市川、は何故、非常の尽力を以って「天狗党の乱」を鎮定したか？

▼これに関して元水戸藩士内藤耻叟氏が重要なことを証言している。

◎この時、国中の議論二つに分かれて勅書返納論と不返納論とあり、不返納論は多く激論の徒なればこれでは国の行く末もどうなるかと老公も御心配の余り、朝比奈弥太郎、佐藤図書、市川三左衛門を御前に召して次のように言われました。

「その方共は世臣の家柄なれば、斯く世上騒がしき時節に付き忠勤を励まし、吾家の為、悪からざる様尽力を頼むなり。渡辺半介の一隊を遣したれど、万一敵対して戦いになれば、その方等を遣わす可れば、何れも、余が存意を誤らず奉公せよ」と前藩主斉昭公より厚きお言葉を賜ったのである。

三人は是までは、結城の残党の如く思われ、浮かぶ瀬もなかりし処、斯く、俄かに懇命を蒙りたれば、大いに感激して、これより三人は、「一朝御家に事あらば烈公の御主意を奉じ力を尽くすべし」と常に覚悟したのである。

筑波の騒動が起こり、小石川の政府も之を鎮撫することが出来ず、水戸の政府も放任状態であるから、この時こそ御奉公の時節として、三人南上（江戸へ行く事）して、遂に、甲子の如き有様となった。と内藤氏は語った。と（水戸史談・きのふの夢）にある。

▼（幕府正規軍、諸藩連合軍、諸生党）　対　（大発勢、筑波天狗勢、武田勢、潮来勢）の水戸藩内戦となった。いわゆる（天狗党の乱）である。

▼烈公様に忠誠を尽くし、水戸藩のために尽力したのに何故不忠の臣なのであろうか？

市川三左衛門の辞世の句である

「君がため捨つる命は惜しまねど
忠が不忠になるぞ悲しき」

その3は参考資料③

元治元年6月17日、市川は筑波山の激徒追討の命を受け諸生五百余人を率ひ出陣す。順公より市川へ御直書を賜ふ。

（此度武田伊賀守初め慎み申付候間其外不宜者も有之候は、夫々厳重不申付候ては此先き取締方不相立、依ては品により水戸表迄も罷り越、浮浪の徒所置可致。尚又伊賀守同意の者役替申付候儀彼是相拒き候者有之候節は其方決断を以て取計候儀不苦候）

▼元治元年6月

「このたび、武田伊賀守はじめ謹慎すべく申しつけていたが、ほかにも宜しからずのものもいる。それぞれ、厳重に申しつけておかなければ、この先取り締まりもできなくなる。

状況によっては、水戸に行き、浮浪の徒を処置すべし。なお、伊賀守に同意の者の役職を交代させたが、それを拒否する者がいたら、その方が決断を以て取り計らってよい」と。解釈川上水戸見聞実記にある。

▼諸生派の重臣　（市川、朝比奈、佐藤）が何故生命をかけて戦ったのか、それは斉昭公、慶篤公の特別のご命令があったからでしょう。

▼このような事情があるにもかかわらず、門閥諸生派の人々は何故不忠の臣なのでしょうか？

それは明治維新後、薩長藩閥政府の統治方針、皇国史観「皇民化教育」によるものと思います。

▼現在は、皇国史観の呪縛から解放され、多くの人々が、自由な研究により、水戸藩幕末史の真実を認識し、新しい「水戸史観」によって諸生派殉難諸士の汚名が払拭され、名誉が回復されることを願って止みません。以上

「川上」

添付史料「原文」は難解ですが、精読、ご理解の程を宜しくお願い致します。

弘道館　前に建立されている水戸藩第九代藩主（烈公様）徳川斉昭公　銅像

水戸の党争こぼれ話　より抜粋

党争の見方さまざま

水戸の党争について、水戸藩末の精細なある日誌に、党争のない地方から来た一留学生の話が紹介されている。それは余り平穏無事だと競争心が起こらず、進歩がないといった意味に受け取れたことばである。確かに、明治維新の成立に大きな役割を果たした長州、薩摩、土佐藩などの西南雄藩の藩内事情をみても、党争の無かった所は無い。

先日、新派で水谷良恵さんらの演ずる寺田屋騒動の凄惨な場面を見て、私は薩摩藩の輝かしい業績の裏に、藩士同志の見解の相違、激しい暗闘のあったことで、党争は水戸ばかりでなかったことを、改めて知らされた思いであった。

だが「水戸藩党争始末」（明治26年刊）の筆者がこの本の末尾に、水戸の党争を評して、「党禍の残虐、東西古今未だ寡って聞かざる所なり」と結んでいるように、水戸のそれは、同じ党争でも、そのむごたらしさは、他に例を見ないものであった。そして、その党争からは、なんらの進歩も生まれなかったことも事実である。

それでは、水戸藩党争をどのように考えたらよいのか、

これに関する二、三の見方、主張を、諸書から拾ってみよう。

まず、水戸で党争の経過を、私情の排除に努めて、正しく世に伝えようとしたものは、前記した「水戸藩党争始末」である。それを読むと、「両党の争ひは、口を公義に借りて私闘をなしたるものにて」という解釈に出会う。これは上級の者は、世の変動にも、自分の地位財産を守っていこうとし、当時、成り上がりといわれた者は、新時代を望んで上級の者にとって代ろうとする、といった見方が根底にあっての解釈ではないかと判断される。

この本についで、世に出ての注目されたのは、高瀬真郷の「水戸史談」である。その凡例（明治35年）の第一に、「水戸藩党争の事蹟世に伝ふるもの、少なからずと雖も、概ね、党派感情に基き、私に正姦を分かちて、みだりに、褒貶（ほめたりけなしたり）をなす、公平なりと云ふべからず。・・・・著者もとより眼中に党派あることなし。

故に、天狗にも左袒（味方する）せず、所謂、姦党（反天狗派、いわゆる諸生派）も非議せず、政権争奪の為に、両党相争ひしに過ぎず、と信ずるが故なり。」といってるが、これは明治時代にあっては、大胆不敵な解釈だったに違いない。

また、この本には、「正だの、姦だのと符牒をつけて歴史を書くと云は、言語同断な話で」という意見も載っており、党争は貧乏に起因するといった面白い話も紹介されている。

早くから、水戸にも、党争についての考え方はさまざまあって、決して、一つでなかったことだけは知っておく必要があろう。

以上参考までに記す。以上

★明治元年十月二日
水戸城側・天狗党と弘道館に陣を敷いた諸生党市川勢が激しい戦いを行った。今も、弘道館正門に当時の弾痕を見ることができる。
両党共に、百人近くの戦死者があり諸生党は敗北し、生存者は水戸を脱出し、千葉県臼瑳市八日市場で水戸藩追討軍と最後の決戦をし、壊滅した。

水戸城　大手橋より弘道館を正門を望む「見る」

桜田門外の変」の講話

顧問　野澤　汎

法要式典、直会、終了後、桜田門外の変について、野澤先生の講話をお聞きしました。

平成21年（2009）は、水戸藩開藩400年に当たり、しかも桜田門外の変から数えて150年目の節目に当たります。その記念事業の一貫として桜田門外の変が映画化されることになり、水戸市民ボランテア活動「桜田門外の変映画化支援の会」が発足し進められた。

千波湖畔に映画オープンセットが建設され、多くの観光客も訪れ賑わいを呈した。

この映画は、原作吉村昭著・同名の「桜田門外の変」上下2巻であり、事件現場責任者として指揮を取った関鉄之介が主人公である。鉄之介は井伊大老襲撃から、約2年間逃亡生活を送り、のち捕らえられて死罪となった。

この映画は観客の目には、なぜ井伊大老を襲撃したのかなど、時代背景がよく分からないと聞かされた。

「桜田門外の変」は、異なった歴史的事実が重なり合って、思わぬ展開へ発展した。これら歴史的事実に基づいて、加筆した積りだがどうであろうか。

以下、詳細に史料説明がありました。大変、参考になりました。

「会津地名人名散歩」より抜粋

宮崎十三八

井伊大老暗殺事件について

万延元年（1860）3月3日、桜田門外で時の大老井伊直弼は水戸浪士に暗殺された。

白昼堂々と、それも天下の江戸城前で幕府の第一人者を暗殺するとは、断じて許せぬと十四代将軍徳川家茂は烈火の如く、怒ったという。

家茂はすぐさま兵を出して、暗殺者の糸を引いていた張本人の水戸藩を討伐しようと言い出した。江戸城内は騒然としたが、この将軍を誰も止めようとしなかった。

その時、いつも物静かな会津藩主松平容保が、殿中に響くような大声で言い放った。

「宗家と御三家が事を構えるなんて、あってはならぬことです。神君・（家康）は断じて許されませんぞ」

容保は直ちに水戸家へ家臣をやって将軍家に謝罪させ、更に、水戸家へ降下された蜜勅の返還問題をも解決した。

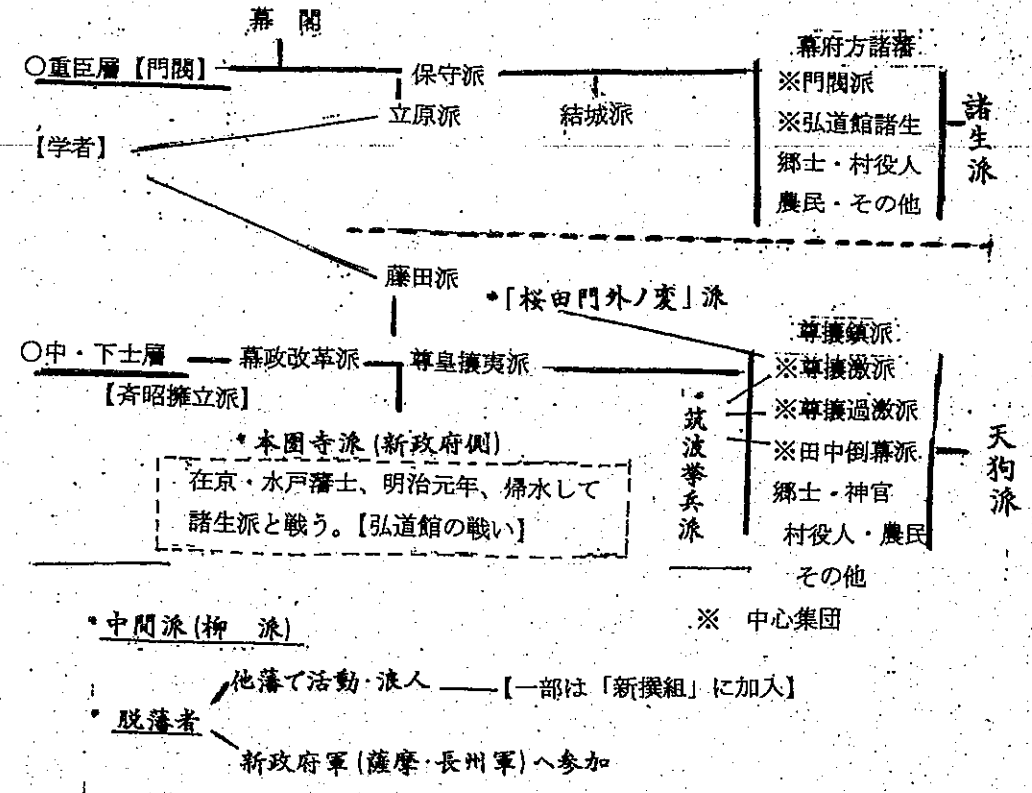
家茂は容保に感謝し嘉賞した。しかし、容保には水戸家を守る立場もあった。容保の生家・高須松平家の祖父義和は、水戸家の出身であり、会津松平家の先君容敬は、実は義和の子であるから、容保にとっては実家も養家も、水戸家の血筋であって、徳川一門内の争いは絶対不可だったわけである。

（会津歴史家）

幕末・水戸藩党派対立相関図

幕末・水戸藩・党派対立相関図

宮澤　正純・著　【県立歴史館報12】を参考



◆史談随想　（農民の戦い）

幕末水戸藩党争と農民勢の動向

副会長　前澤瑞穂

鯉渕勢・河和田勢の成立とその戦跡

1　藩内党争に加担した農民とその背景

水戸藩幕末期における天狗党・諸生党の党争についてはよく知られているが、この事件に多くの農民が参加していたことはあまり知られていない。藩の党争の原因やその結果については省略して、農民の動向、就中、鯉渕勢・河和田勢について考えてみたい。

農民は村役人を中心とし、それぞれの立場や地域の状態に応じて、積極的に参加した者、あるいは自衛のために止むに止まれず参加した集団があった。

天狗党への参加は、郷校で学んだ上級農民、医者、神官らが多くみられる。彼らは郷校で学び「尊皇攘夷」に共鳴し、進んで天狗党に加担したと思われる。

一方、諸生党への参加は、止むに止まれない深刻な事情があった。それは「悪天狗」と言われた一部天狗派の暴挙に対する自衛抗戦であった。「桜田門外ノ変」から半年後、万延元年（1860）八月、前藩主・斉昭が死去している。その四年後、元治元年（1864）三月、天狗党・藤田小四郎らが、尊皇攘夷・幕政改革を標榜して筑波山に挙兵した。七月には、幕府及び水戸藩からの天狗党追討令を受け、これに従って諸生党は天狗党追討の主軸を担っていった。

2　田中愿蔵隊の暴挙に対する農民の自衛手段

天狗党の目標は「幕政改革」であったが、田中は「討幕」による世直しを標榜していた。田中らはその資金稼ぎのために豪農、豪商からの強奪、火付けなどの暴挙（栃木市と土浦市）により、民衆の恐怖と憎悪の的になっていた。

これに対して、農民は自衛のための農民隊を組織し、さらに諸生党の武士勢に合流し抗戦した。諸生党は田中隊の暴挙を天狗党全体の非として農民を教唆し、協力を約束した。幕府も藩も、農民隊を天狗党追討軍と認め、武器を貸与して抗戦に当たらせた。

◆河和田勢について

（第十回「内原郷土資料展」報より）

元治元年七月、　河和田村郷士・平戸長衛門を旗頭とし、河和田、見和、中丸、萱場新田、飯島、金谷、大塚、加倉井、大足、牛伏、黒磯、有賀、田島の十三ヶ村をもって、自衛のために結成された。藩庁に協力することを申し合わせ、はじめ水戸城の要所や那珂川沿岸の警備に当たっていた。しかし、神勢館の戦い後、八月から九月にかけて、鯉渕勢と共に、長岡、秋葉、鳥羽田で戦った。

九月下旬には、県北の太田方面の警備に当たった。

十月には部田野原合戦に参加、更に、下旬には、諸生党の将・寛助太夫軍に協力して、那珂湊戦に参加、天狗党を敗走させた。

十月二十四日より太田、大宮、山方、舟生、鷲の子、馬頭で転戦し、戦力を発揮している。

十二月五日、水戸城中において、その功を賞されて後、お役ご免となった。

◆鯉渕勢について

（第七回「内原郷土資料展」報より）

天狗党に恐れを感じ、八郷地方の連合勢や、近くの河和田勢の動きに呼応し、元治元年七月二十五日に、行動を開始した。

八月に入り、幕命により天狗党追討のため、藩の諸生党に組み入れられた。土地の地理に明るいために、案内役として先頭に立ち、戦場を駈けめぐった。合戦の激化する九月下旬には、幕府軍付属を命じられた。赤色と萌黄色の制服が支給され、「鯉」の肩章をつけ、正規軍と共に激戦に参加した。騒乱の鎮まった後、藩から褒賞が与えられた。

しかし、明治維新により、政権が逆転し、勝者となった天狗党から、追及を受け、苦しい時期を迎えることになった。

◆元顧問・故来栖平造氏の著書より

★この地域（茨城県内）で元治元年（幕府連合軍、市川諸生党、自衛及び報復の為の農兵隊）と

（松平頼徳勢、榊原大発勢尊攘鎮派、武田・山国尊攘鎮派、田丸・藤田尊攘激派、潮来・小川郷校激派）が戦った。

この戦いで、鯉渕勢は雌雄を決する部田野合戦に参加し、多大の戦功をあげ恩賞を受けた。その後、彼らが大子方面へ逃走したので帰村した。

★宮沢正純氏の論文によると、

明治元年（1868）二月、「奸徒を掃除し、反正の実行…」の勅諚により、四月九日武田金次郎勢及び本圀寺党が京都を発し、五月水戸に到着すると直ちに、奸徒・朝敵に対し、暴虐きわまりない追求と殺人を行った。このような殺戮の為、3才以上の男子をすべて殺されると噂がひろまり、鯉渕勢をはじめ諸生党に加担した農兵隊のものは領外へ落ち延びた者も多数あった。その時の執拗な探索と過酷な処置は、現在まで土地の人々に語り伝えられている程であった為、やがて鯉渕勢への参加を口にする人々はいなくなり、記録は意識的に忘れられた。鯉渕勢の実態が不明な理由の一つはこのようなことにある。と述べている。これはその外の民兵隊についても同様であるが、詳細な史料が見つからない為、十分解明されていない。

党争の原因

幕末水戸藩党争史　三つの記録

●水戸見聞実記

夫れ其の禍源の由て来る所を尋ぬるに蓋し学派の争ひより事起りしと云へり、抑本藩の文運は遠く義公に淵源し、其の流風余沢尚を存し儒生学士皆義勇を重んし名節を励む、文公（名は治保、威公六代の孫）殊に文学を崇び以て編史の業を成さんと欲し、乃ち立原翠軒（甚五郎と称す）を史館総裁に挙け日本史編集の事を委任せられけり、立原は才学衆人に超へすと雖も門人の教育引立方は相応に行届けとも風流学にて詩文書画等に専ら心を用ゐたり、又立原の門弟藤田幽谷（次郎左衛門と称す）は学問識見遙かに師の右に出て、加ふるに当時天下の英傑高山彦九郎蒲生君平と交誼最も深く其学風たる実用を本とし意を経世の略に注くを第一の主義とせり、時に小宮山楓軒（次郎衛門と称す）と云へる者あり是亦立原の門人なり、而して己が学力の藤田に及はぬを愧ぢ屢勉強刻苦するも竟に其右に出ること叶はざれば、常に藤田を妬み折りに触れては之を立原に悪く云ひ做せしかは立原意中に疑惑を生じ、且つ国史編修の件に付きても立原藤田頗る意見を異にし、立原は紀伝のみを編て可なりと言ひ藤田派志類を修めすんはあらすと論す、文公は藤田の説を取り立原を退け、武公（名は治紀、文公の長子）益々藤田を信じ史館総裁とす、是を以て立原は深く藤田を悪み小宮山亦傍らより藤田の事を彼れ是と讒言したるにぞ立原大に怒り師弟の義を絶てり、藤田数度人をもて詫び入れども更に釈けす、其中立原も藤田も没しけるが両門の弟子各門戸分て軋轢殊に甚し、是れ即ち党禍の濫觴にして甲辰の国難は此時に胚胎すと云へり

●水戸藩党争始末

抑水戸の党派は、立原翠軒、藤田幽谷か学派の異同に濫觴し、結城寅寿、藤田虎之介か政権の争奪に大成し、市川三左衛門、武田耕雲斎か戦闘せしに依て峻烈を極め、武田金次郎等か市川の党を殺戮し、殆と之を殲殺にしたるに依て終りを告けたるなり、然れとも骨肉相屠り朋友互に殺したるの怨恨は、国民の骨に銘し髄に刻まれて長く消滅せす、余毒今日に存して、一郷の裏、一閭の間、動もすれは反目嫉視するの状あるもの、亦実に已むこと得さるなり、蓋天保甲辰より明治戊辰に至る僅々廿余年間に、両党の人士を殺戮せしこと、其幾千人なるを知らす、屍骸積て山を為し、流血は漲て川を為す、今日水戸上下市なる夥多の墓地に、秋の野の薄よりも繁く立並ひたる石碑木標の年月を検すれは、概皆元治慶応の際党派の禍に罹り、愛国忠君の心事不幸にして天人の諒する所とならす、恨を呑て刀下の鬼となりし志士義徒の墳墓にあらさるなし、誰か之に対して党禍の惨虐峻烈なるを嘆して寒心酸鼻せさる者あらんや

正奸名称の濫觴　藤田党を正党と褒め、結城党を奸党と貶したる濫觴はの、天保甲辰烈公御慎の時にあるか如し、即ち此時同しく罪　蒙れるものと、御雪冤の為めと称し、禁を破りて江戸に上り周旋せしを正党と云ひ、国元に謹慎して居りし者と、罪蒙らさりし者を概して奸党とは名付けたり、扨君辱しめられ臣死すへき国家大難の折柄、臣下の一致して御雪冤の事に尽力せさりしは如何の次第かと云に、是には種々の事情あり、或は平生老公の政治を喜はさるもあるへく、或は公在位中、褫職減禄の処置蒙にて、君を恨みしもあらむ、或は又幕府の負惜は旧来の痼疾にて、東照宮の大久保忠隣に於ける、大猷公の青山忠俊に於ける、其冤罪なるを知りつゝも、其身を終る迄容赦の沙汰なかりしにて知るへく、されは老公雪冤の事も、此方より彼是訴訟する時は、幕府令使其過を知るとても、例の負惜にて、、却て其怒を重ぬるにも至るへく、寧ろ深く謹慎して時機を待つに如かすとして国に慎み居りしもありしなむ、然るに一方の請はすして境を出てたる一派は、之か為め夫々処分を受けたる憤激より、当路の有司を始め越訴せさる者をは、一概に彼も奸此も奸と排斥したる故、最初は敵ならぬ者迄も、其軽侮を怒りて敵となりし形ちなり、扨巨室世家か、老公の再出を喜はさりしは、其内心役義禄高を惜みしもあるへく、甚た卑しむへきは勿論なから、其も直接に君公の刃を受くると云ふになく、結局反対党の為めに魚肉せらるゝ次第なれは、出来得る丈は其身を遁れんとしたるも、人情亦憫諒すへきなり、俎上の鯉の如く、身動きをもなさすして刃を受けよと、此頃の武士に注文するは出来ぬ相談にて、老公か復ひ国政を執らるれは、ミスミス禍害か身の上に振掛るを知りつゝ、老公再出の事に尽力すると云ふ大忠臣を末世に求むるは、是亦頗る無理なるへし、且又一方か雪冤に奔走せしも、老公か再出になれは自分達も出世の望みあり、若し再出せられさるに於ては出世の望みなきのみか、役禄召上られ、隠居慎抔の禍害は眼前なる故にこそ奔走せしなり、国を恤るも緯を恤るも、畢竟は身を恤るにて、両党共に此処は五分々々なり、要するに此際に於ける両党の争ひは、口を公義に藉りて私闘を為したるものにて、藤田も世人の思ふ程正にはあらす、結城もて敵党の謂ふか如きの奸にはあらす、其一方を正として他の一方を奸とするは、俗に所謂買被りなり、況や勤王と云へる名義の美なるに眩るめき、成敗の跡に就て

是非曲直を判断する如きは、真に皮相の見と謂ふへきのみ

●故老談水戸史談（きのふの夢）

水戸の騒動の原因は或は立原翠軒の学派と藤田幽谷の学派と互に争ひたるが初めなりと言ふ人もあり、或は結城寅寿の一派国政を紊せし故なりと言ふもあり、或は攘夷論を唱えて私に兵を起せるが原因なりと云ふものもあるなり、此等は皆一時の動機となりしものにて原因と認むべきものにはあらざるべし

…烈公下国の時に老臣番頭等時機にあらずとて意見書を呈せしとき烈公怒て此の人々を処罰せしかば藩中初めて公に対する不平党を生じたるなり（これ第一因）

藤田戸田の人々新進の身を以て要路に立ち権勢も少からず、これより藤田派の人材追々用ひられて立原派は之に及ばず、此に於て学識ある人々の中に不平を抱く者を生じたり、此人々勢ひ門閥家の不平党と気脈を通せざることを得ず、こゝに於て不平党は多数となりしなり（これ第二の原因）

烈公謹慎を命ぜられ藤田の党罪を獲るに至りては順公勢ひ藤田派以外の人々を用ひざるを得ず、こゝに於て烈公に不平なりし一派の者多く要路に立ちて恰も改進派失敗して退き保守派再び政府に立ちたるが如し（是れ第三の原因）

失意の改進派は再び政権を得んと欲して運動をなし、得意の保守派は政柄を奪はれじと之を防ぐ、一は縁故深き烈公を奉じ、一は定見なき新公を擁立して互に争ふこと数年漸く両派の団結固く幕府の勢威を以てするも之を如何ともなす能はず烈公の賢能も手を下すの道なきまでに至りしなり

夫の勤王と云佐幕と云ふ名義の如きは固より両派の争点にはあらず、両派共に勤王をあしきと言ふ事を聞ずまた佐幕を不可なりと論ぜしものなし、全く感情の衝突より知らず識らず相分れて年を経るまゝに反目の度を高め、相見る仇敵の如く、之為に主君を無視し名分を忘れ、只感情に駆られて相戦ふ、文教を以て士民を養ふ二百年こゝに至りては殆ど無智文盲の徒にも劣りたる有様なり

● 阿部伊勢守宛斉昭書簡（弘化二年）「新伊勢物語」所収

…只今の藤田虎之介親次郎左衛門と申者ハ、立原甚五郎（後年剛といふ）門人ニて源文の代取立に相成候処、日本史の義ニ付論出来、源文にては次郎左衛門説を宜敷存立原を退隠申付候故、立原と藤田と絶交ニ相成り夫より門人二ツニ分レ申候処、只今と相成候てハ何を申候も源文源武源哀并拙老と四代の間立原の方をハ用不申候へハ、立原の方ハ僅ニ藤田晴軒（元は侍といふ）七十余、鵜殿平七（此者鵜殿のよしに候へ共者ハ不存候）七十余、右の外何レも源文代の人ニて僅ニ十人か廿人ならてハ無之、藤田次郎左衛門の方ハ四代用申候へハ士分ハ勿論、郷中までも大方ハ次郎左衛門の門人又ハ孫弟子抔申者多有之、漸々拙者代立原の方如前文少く相成り一方に相成候故扱ニ宜く候処、兼て間を見すきをミ晴軒等ハ次郎左衛門の方をつぶし立原の方ニ致度存居り候処、結城寅寿事ハ故青山量介門人ニて量介ハ次郎左衛門の門人ニ候へハ、結城事ハやハり次郎左衛門の孫弟子ニ候へ共、戸田藤田を打落し自分権を握り申度藤田晴軒へ同意致し、拙老ケ様被仰付候を幸とし拙老代申付候役人ども入かへ（但シ公辺より御内密のよしニて役人引かへ候よし薄々承り申候へ共是迄左様の事覚不申候へハたとへ御内密有之ニもいたせ此方より申出候人無てハ御内密可有之者とも不被存候）次郎左衛門の門人共をハ取のけ、立原門人のミ入れ申度候処前文の通り人数無之候故、少も学問有之人ハ役方ニハ只今一人も無之幼年より文武とも怠り私曲抔致候人のミ相成り…

…先ツ第一ニ天狗と申候て別種ニハ無之同し家中ニて是より是迄が天狗と申界ハ無之、父ハ天狗にても子ハ俗物姦物も有之、父ハ俗物姦物ニても其子ハ正論の天狗も有之、夫のミならす一人の身の上ニても昨日迄ハ姦人へ組し居候ても姦人の事業を不宜と存、一言申候へハ直ニ天狗と申ニ相成打退ケられ、此節の重役共何レも姦物、右ニ順下役迄も皆々姦物のミ取用ニ相成候へハ、有志の者も姦物とか乍存先ツ重役の事故夫ニ組し居候ても余りなる事有之候へハ、存意等申聞候へハ直ニ夫も天狗是も天狗と申候て打退益姦物ハ権を握り候仕方ニ有之候

＊ 江戸ニてハ口慢者抔を天狗と申歟ニ承り候所、水戸ニてハ義気有之有志の者を天狗と申候、たとへハ勝手困窮ニて今日の暮ニも指支なから、食し候者も食し不申書物を買入又ハ刀剣甲冑抔買入容易ニ人ニ出来不申事を致候を、中々人の出来候事ニ無之天狗ニ可有之と感心致候より、義気つよく国家の為ニ忠を存候者は何レも天狗の仲間是も天狗の仲間と申様ニ相成候義ニて、天狗と申ハ拙老カ国ニてハ義勇のかへ名と申者ニて、江戸ニて申候とハ相違ニ有之候、乍然此節姦物共盛ニ相成候てハ天狗ハ悪人のかへ名と可相成候、御一笑可給候、拙老も幕府へハ兼々忠節の心得ニ候へハ姦物よりハ大郎坊とも可申歟呵々…

幕末水藩諸役構成

◎布衣（又ハ本禄300石以上取来）以上　　○物頭以上

家老

君側
- ◎小姓頭
- ○小姓頭取（通事）
- ○小姓
  - 中奥番（近習番）
  - 小納戸

政府
- **◎用達(執政)**
- **◎若年寄(参政)**
- **◎側用人**
  - **(御用調役)**
  - **奥右筆頭取(書記総)**
  - **奥右筆(書記)**
  - ↓
- **○町事行**
  - **勘定奉行**
  - **郡奉行(郡宰)**

監察
- **○目付(大監察)**
  - **小十人目付(小監察)**
  - **歩行(徒)目付(小監察)**

- ◎城代
- ◎大寄合頭（表家老）
- ◎大番頭
- ◎書院番頭
- ◎馬廻頭
- ◎新番頭
- ◎進物番頭
- ◎奥番頭
- ◎土蔵番頭
- ○持弓頭
- ○持筒頭
- ○小十人頭
- ○歩行頭（徒頭）

書院番
大番
御次番
進物番
馬廻
新番
奥番
土蔵番
小十人
歩行（徒）

●翌丑年（天保12年）の夏月月末結城事奥右筆内藤市松月末結城通り結城の手下に候へ、結城宅へ召に相成候て直に奥右筆にこれいきよいたし候へ召連れ野生宅へ参り、今晩はゆるゆる相談致度事之あり参り候由にて、うなぎの蒲焼沢山持参に付、野生は例の通り酒等相用、結城へは下戸品等振舞、三人安坐にて咄合候処、結城申候は、扨外の儀には之なく、毎日毎日御同席にて相逢候へ共、御城にては相談出来申さず候間宅へ参り候、若年寄位べらぼうの役は之なく候、最早半年の余相勤め候へ共、一つも御奉公と存候事は之なく、小役人め等が申出、又は表方の馬鹿やつらが願書取次候ひて、奥右へ回し候へば、奥右はいついつも打込置、仲魔にて夫々自由自在に相談いたし年寄へ持出し、年寄は始めて承ることゆえ、ろくろく分らざる儀を奥右どもよきようにいひくるめ、其上にて達し書等認め、若年寄べやへ持出し、早々達し候様抔申候間、此事は斯様にては如何と申候へば、年寄衆御了簡と申候へ共、みんな此市こう抔が思召也、扨事に寄候ては願人いそぎ候事も之あり、奥右へ回候へば、みすみす隙取候ゆえ、たまたま宅抔にて直挨拶いたし候へば、跡にては書記共にぐつぐついはれ、又達しの意味を聞され候ても即答相成ならず候ゆえ、利口なやつはみんな奥右へやへ回り、エヘンエヘンにて内談、いやはや若年寄も誠につまらず、執政迚も当時の景色にてはやにさがりて煙草斗ふかし候様子、誠に馬鹿馬鹿しき事に候（「水戸幕末風雲録」所収・藤田東湖「結城寅寿行状記」より）

【参考史料①】

●…井伊の老臣木股清左衛門は、藩の重役か虚偽の届書を幕府に差出して、主人の喪を秘したるを不可とし、閏三月六日、閣老脇坂中務太輔へ一書を呈し、御法通り井伊取潰の所置あらんことを請ふ、其意、依て以て士氏を激励し、水戸へ対して復讐の挙あらんとせしものに似たり、海内伝聞して其志を悲しむ、其書に云ふ

故掃部頭、当三月三日登城掛け、外桜田門程近にて、浪士躰の者共に重傷を請け、折節降雪にて咫尺を不弁とは乍申、供方の者共防禦不行届の仕合、僅計りの浪人、仮令如何様の狼藉に及ひ候共、即時に捕へ候は勿論の儀に候処、不及其儀、僅一両人打留、其余は取逃し候段、当家の恥辱、誠に以て奉恐入候、其上前文御届、掃部頭名儀にて奉申上候段、不吟味千万、奉恐入候、私詰候はゝ、右様の儀は仕間敷奉存候、右不調法の御咎奉伺候、且思召有之、御役御免被仰付候共、今度の始末世間一統存し候て、種々の取沙汰仕候上は、当家御取潰しの儀は必定と、家中一同覚悟仕居候、乍去先祖直政、直孝の武功被思召、家名其儘御立置被下候はゝ、此後国持外様の諸侯方、此方の儀に紛敷異変万一有之節、家名御取潰有之候はゝ、依怙の御沙汰と可称歟、若又当家振合を以て、家名被立置候はゝ、御政事の批判世上に可仕、左候ては奉恐入候、依之掃部頭不覚悟の始末は、家中一同深く奉恐入候間、御正路の御沙汰奉願度、其後祖先の忠節被思召、聊たりとも家名被立置候様奉願候、猶以て家中の者、并領地の百姓共に至る迄、当家不覚悟に依て、無余儀御政事通り家名御取潰被仰付候趣、篤と申聞、心得違無之様利解仕、御差図相待ち、閑静に退散可仕覚悟に御座候、以上　　（水戸藩党争始末）

【参考史料②】

●桜田の事件に対する水戸の藩論は如何なりしやと謂ふに、最初より勅書不返を主張せし輩は此の挙を快とし、金子、高橋を以て尽忠報国の義士と称するに至りしも、老公の意を遵奉して勅書返納を可とせし者は皆之を非難し、君国を危ふする者なりと迄に切論せり、国友与五郎は水戸の儒臣にて、小姓頭取より侍講及ひ史館総裁を兼ねたる者なるか、存意書を作りて政府の当局者に与へ、桜田の挙を痛議す、其書に云く

扨上巳桜田の一条、大変を引出申候、表向は何敗忠臣らしく候得共、情実を申候へは、頑迷執拗之愚人共、一旦犯闕之所業に及候上は、今更首を延て降人に出候事も出来不申、被召捕候へは首はなしと、進退維谷、身の置所なき故に、為天下除害と云名を借り候て、国の存亡、君之御安否を度外に置きたる兇徒、死を畏れぬ計りか士に御座候はゝ、犬狼も同前の事、礼も義も失ひ候ても、己れか我意を達し候所行、これにても忠臣に御座候はゝ、一向に道は立ち不申候、礼を守り義を蹈んて、首尾調申候へはこそ、君子の行とも可申処、扨々無謀の至り、非義の義を義に心得候哉、非を飾候哉は不相知候へ共、有勇而無義則為乱、好勇不好学其蔽也乱と申聖語、今更敬服仕候、為天吏則可以伐之、為士師則可以殺之にて、何程天下之為に害を除くと申候ても、夫々分際も有之儀、匹夫にして侯伯を殺に至り候ては、以燕伐燕の姿に而、仁義の道には遠かり申候、且彼張子房、大石良雄は亡国の遺臣、一身の外関係も無之候へ共、夫すら良雄は大学の閉門御免迄は指扣候由の処、此度は眼前に君国も有之儀、彼者共の蠹粉は言に足らす候へ共、如何なる国難を引出し候も難計、然るを悍然として顧みる所なく、偏に一己の我意を張候は、実に如何の事に御座候哉、且彼か姦悪増長の日に至り候はゝ、天下の勢も一同に変革可仕候へ共、時節も少し早過き候様に被存、殊に御家浪人より出候而は、出所も甚不宜、全私怨を報候為の様にも相見候間、此上時勢変革可仕共不被存、何分にも両君様是迄の御配慮相著れ候て、彼等一己の罪に相成候様仕度と奉存候へ共、如何参り可申候哉、口書は公儀御役人の心得次第に而、どの様にも拵らへ可申、且乱妨の徒は浪人出奔の者に候段、最初より追々御届も有之候へ共、既に此度御登城見合之儀、井伊老御免と一同に、睨み合て被仰出候振に而は、御家へも疑念かゝり有之儀に相聞、不得其意事に付、此後如何参り可申哉見留も無之、甚心配仕候、第一右兇徒の余類を寛宥に被指置儀、幕府の有司疑念の種と相成、如何なる讒言を来し候程も難計、心配に御座候（下略）

此与五郎は、桜田事件の主謀たる高橋多一郎の師にして、勅書不返論を作りし梅沢孫太郎の兄なり、而して其論議する所実に斯の如し、以て当時藩論の如何に分裂し居りたるやを察すへく、而も此の分裂は大に藤田党の勢力を衰弱せしめ、遂に元治甲子の大失敗を招く原因とはなりしなり　（水戸藩党争始末）

【参考史料③】

●（元治元年６月）十七日市川は筑波山の激徒追討の命を受け諸生五百余人を率ひ出陣す登下順公より市川へ御直書を賜ふ

此度武田伊賀守初め慎み申付候間其外不宜者も有之候は夫々厳重不申付候ては此先き取締方不相立依ては品により水戸表迄も罷り越浮浪の徒所置可致尚又伊賀守同意の者役替申付候儀を彼是相拒き候者有之節は其方決断を以て取計候儀不苦候

右の如く大勢出陣し邸中へは朝比奈佐藤等僅の人数残り留まれり　（水戸見聞実記）

【参考史料④】

●甲子の時に朝比奈、佐藤、市川等非常の奮発をなし壮士を率ひて戦場にも出でこの三人の協同尽力にて甲子の乱を鎮定し一時の小康を得たる事なるが一方より見れば三人は姦党の巨魁なり、国賊の張本なり、然るにこの三人が何故に志を同ふし死生存亡を賭して斯く働きしやと常に不審を抱き居たるが、一日内藤耻叟氏にこの事を聞たるに、それには子細のあるなり万延元年の正月、激論家ども長岡に屯集して勅書を奪取らんとせしとき、烈公より儒臣を派出して説諭をなしたれども一向に聞入れず、乱暴の振舞に及びし故若年寄渡辺半介を大将にて打手の人数を出されたる事あり、この時国中の議論二ツに分れて勅書返納論と不返納論とあり不返納論は多く激論の徒なれば、斯ては国の行末も如何なり行にやと烈公も御心配の余り朝比奈弥太郎、佐藤図書、市川三左衛門を御前に召し、其方共は世臣の家柄なれば斯く世上騒がしき時節に付忠勤を励まし、吾家の為め悪からざる様尽力を頼むなり、渡辺半介の一隊を遣したれど、万一敵対して戦ひになれば、其方等を遣す可れば何れも余が存意を誤たず奉公せよ、と厚き仰を蒙りたれば三人共是迄は結城の残党の如く思はれ、浮ぶ瀬もなかりし処斯く俄に懇命を蒙りたれば大に感激してこれより三人は一朝御家に事あらば烈公の御主意を奉じ力を尽すべしと常に覚悟したるなり、筑波の騒動起り小石川の政府も之を鎮撫する事能はず、水戸の政府も放任してあれば、この時こそ御奉公の時節なれとて三人南上して遂に甲子の如き有様に至りしなりと語りき　（水戸史談・きのふの夢）

no16

水戸市教育委員会
水戸市制施行一一〇周年記念
「水戸の先達」より

69 内藤 耻叟

肖像と伝えられるもの

島田三郎が『開国始末』(明治二十一年刊)を著し、大老井伊直弼の功績をたたえ、水戸藩および徳川斉昭の業績を消極的な評価に終始すると、耻叟は実証主義、考証主義の立場に立って『安政紀事』を著し、『開国始末』の誤謬を一つひとつ訂正し、水戸藩の立場を詳述した。

耻叟は文政十年(一八二七)十一月、水戸藩士美濃部又三郎茂政の次男として水戸に生まれた。幼名は幾之助、彦十郎、通称弥太夫、諱は正直、字は仲養、大道、王道といい、耻叟、碧海はその号である。

幼くして会沢正志斎に学び、藤田東湖の塾にも通ったが、弘道館が開設されると、ここで学んだ。

弘化三年(一八四六)二〇歳の時に、内藤正輝の養子となった。内藤家は代だい軍事掛を勤めていたので、その跡を継ぎ小十人組先手物頭格軍事係となった。

安政二年(一八五五)軍用掛に抜擢されたが、翌年門閥派の結城寅寿が死罪となると、連座して処罰された。

安政五年許されて使番となり、斉昭の兵制改革にともない、大沼村(日立市)に砲台が建設されると、その守備を命ぜられる。

この年水戸藩に戊午の密勅が届けられる。攘夷の準備と密勅の雄藩への廻達が記されていた。当時水戸藩は、井伊直弼の無勅許条約調印を批判したために、斉昭、慶篤、一橋慶喜ともに謹慎を命ぜられ、藩政は井伊家と絶縁となった高松藩松平頼胤らが、後見職として門閥派に指示をあたえた。

幕府は門閥派を通して密勅の返納をせまる。尊攘派は返納の絶対反対を唱える激派と、朝廷への返納やむなしとする鎮派に対立して、藩政は混乱に混乱を重ねることになる。

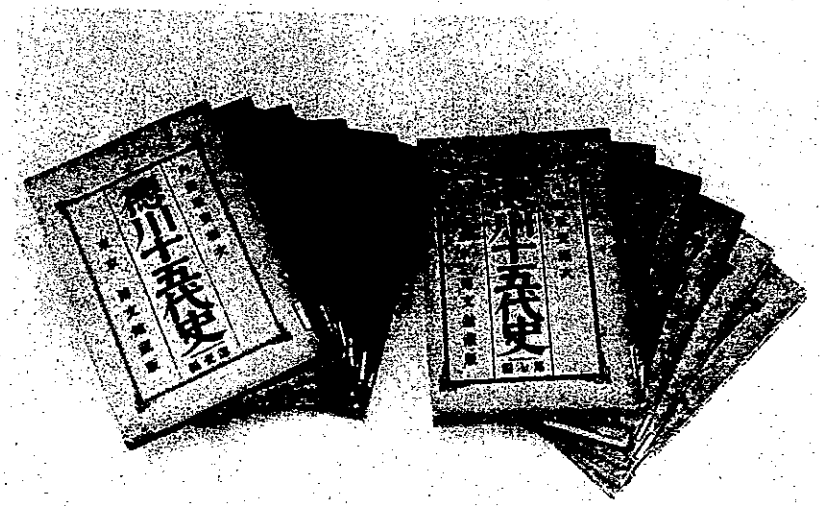
耻叟は斉昭が密勅を返納しようとしているのに、家臣の者がそれに反対し、返納を実力で阻止する行動は許されないと、激派の態度を批判した。いうならば鎮派の態度を示したのである。

翌六年に藩情が変化すると、耻叟は慎、隠居を命ぜられた。家督を誠太郎に譲り、耻叟と号して政治から離れ、専ら読書と著作で生涯を終ろうと考えていた。謹慎はその後七年におよんだ。

元治元年(一八六四)いわゆる天狗党の乱が起こると、太田および水戸藩北部の民兵を集めて、田中愿蔵隊と森山・助川(ともに日立市)に戦い、これを追討した。

同年九月罪を許されて御用調役となり、幕府監察戸田五助らと謀り、那珂湊に武田耕雲斎らを攻撃した。

慶応元年(一八六五)軍用掛となり、弘道館教授を兼務したが、翌二年江戸に出て水戸藩の内政、人事について、



編著『徳川十五代史』（茨城県立図書館蔵）

幕府監察堀錠之助らと謀るところがあった。とくに家老鈴木石見守を排斥しようとしたことが発覚、水戸に護送されて幽閉された。

明治元年許されて一月ほど復職するが、四度目の謹慎となる。身辺に危険を感じた耻叟は、佐川純一と変名して東北各地を転てんとした。

明治三年十二月湯沢正直と称して山形県で史生となり、戸籍係、郵便設置取調御用、学校懸、地券懸など歴任した。茨城裁判所が戊辰脱走の罪を寛典に処し、免罪としたのは明治六年五月のことであり、湯原正直を本名の内藤弥太夫に改めたのは、明治十年三月のことである。

明治七年に大蔵省に出仕、おもに統計の仕事に従う。同十年東京府に出仕し、翌十一年には小石川区長となった。

同十四年転じて群馬県立中学校長となり、十七年二月東京大学文学部講師となる。十九年三月には東京大学文科大学教授となった。文科大学教授は明治二十四年まで勤務するが、この間尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員

学力試験委員、陸軍教授、幼年学校附などを兼務した。一時『古事類苑』の編集にも関係している。三十二年宮内庁嘱託となる。

彼の著作には『徳川十五代史』、『安政紀事』、「水戸小史」、「江戸文学志略」、「国体発揮」、「徳川氏施政大意」、「徳川氏貨幣制度」、「碧海漫鈔」、「徳川文教志」、「勅語解釈」、「日本兵士」、「明道論」、「古道指要」、「徳川実紀校訂標書」などがある。

明治になって密勅返納およびいわゆる天狗党の挙兵についての歴史認識については、多くの議論が展開され、とくに川瀬教文らとは激しい応酬があった。川瀬教文が『波山始末』を刊行すると、序文を寄せて武田耕雲斎、山国兵部の行動を評価するにいたった。

冒頭の『安政紀事』には付録に史料紹介があり、その中に会沢正志斎の「開国論」がはじめて掲載され、正志斎の思想の一面を知る好資料となっている。

明治三十五年七七歳で没した。上野谷中墓地に葬られる。

（久野勝弥）

★新潟旅行計画

来年・平成24年は、新潟県北越地方の慰霊旅行を計画しています。その概略をご報告します。事務局

日程平成24年10月下旬～11月上旬
宿泊先　弥彦温泉　一泊
ホテル　未定
募集人員　30名
行き先　新潟県　長岡市、西山町
　出雲崎、寺泊
　弥彦村　与板町

★慰霊の場所「検討中」

柏崎市西山事務所「旧西山町」訪問
西山町　荒木様宅　訪問
　西山町灰爪の丘　諸生党慰霊碑
　参拝
　寺泊　家老・佐藤図書の墓　参拝
　弥彦　水藩・戸崎氏の墓　参拝
　弥彦神社　・参拝
　長岡市
　河合継之助　資料館　見学
　山本五十六元帥資料館　見学
　出雲崎代官所跡
　諸生派本陣跡　見学
　良寛堂　見学

時間の関係で見学先変更も有ります。

供養塔と地蔵尊像

★水戸市教育委員会に恩光無辺碑の史跡指定申請書に添付して提出した関連資料は次の通りです。

1 会報知恩第一号
2 由来碑と恩光無辺碑整備供養文
3 水戸藩国難事件殉難者名簿
4 水戸藩諸生派殉難志士・第一回の慰霊祭挙行について
5 水戸藩諸生派国事殉難者の慰霊供養の経過一覧表
6 慷慨淋漓の碑の碑文
　水戸市・神応寺の碑文拓本より
7 水戸市議会の議事録
　平成21年第2回定例議会議事録
　幕末、明治維新時の水戸藩の天狗派と諸生派の歴史的位置付づけと現在の対応について
8 幕末水藩党争史・三つの記録
　「茨城県立歴史館史料より」
　① 水戸藩党争始末
　② 天保明治水戸見聞実記
　③ 故老実歴水戸史談
9 従明治元年戊辰四月迄己己被仰渡留（襲来賊徒処刑）明細書
　「茨城県立歴史館史料より」
10 諸生党の真実を
　「茨城新聞記事より」
11 続・会津士魂「序文より」
　著者　早乙女　貢
12 現在の水戸市指定史跡一覧
　「インターネット」情報より

◆恩光無辺碑・東日本大震災被災義援金寄付等のご報告

★幕末維新水戸有志を偲ぶ会様より恩光無辺の碑・被災義援金を頂きました。有難う御座いました。

★水戸市当局をはじめ、多くの皆様から碑被災・修復のご支援ご協力を頂きました。有難う御座いました。

★今まで、多くの会員の皆様より、任意の寄付金を頂き、碑の損壊など不測の事態に備えて、恩光碑保存会基金特別会計に積み立てをして参りました。今回の震災被害修復に際し、お役に立つことができて、碑も復旧し立派に立っています。有難く厚く厚く御礼申し上げます。

計報

★常任理事・朝比奈泰仁氏は、平成23年5月7日永眠されました。本会運営にご尽力頂いた事を感謝しご冥福をお祈り申し上げます。

★参考文献と史料

幕末水戸藩党争史　茨城県歴史館
　桜井　明氏
水戸藩党争こぼれ話　著者不明
幕末水戸藩党派対立相関図
　前澤氏提供
史談随想「農民動向」前澤氏提供
会津地名人名散歩
　井伊大老暗殺事件　宮崎十三八氏
水戸の先達（水戸市教育委員会発刊）
　内藤耻叟　久野勝弥氏
妙雲寺伝説　朝日新聞社

★編集後記

★3・11東日本大震災により、「地震、津波、原発事故」大被害を受けた本年も暮れようとしています。被災地の一日も早い復旧復興をお祈り致します。

★恩光無辺の碑が3月11日、東日本大地震により被災し、余震により倒壊することを大変心配していました。これの一日も早い修復について、多くの方々のご支援・ご協力を頂きまして、修復工事が完了致しました。ご協力くださった皆様、本当に有難う御座いました。心から厚く重ねて御礼申し上げます。

　泉下の諸生党殉難者も、建立下さった故室田義文翁や故朝比奈知泉先生も、また、故来栖平造先生も喜んでくれるものと思います。

★今年も残り少なく成りました。寒さもますます厳しくなって参ります。お身体に留意されまして、元気に新年をお迎えできますようお祈り致します。

★会報知恩第10号
平成23年11月15日発行
水戸殉難者恩光碑保存会
編集顧問　前澤瑞穂
編集責任　川上有文
編集委員　綿引周一
編集委員　岡見円礼
印刷　編集部

井伊大老の首 水戸に運ばれ埋葬？

伝説残る寺 脚光

幕末の日本を揺るがした桜田門外の変をめぐる謎が、再び注目を集めている。暗殺された大老井伊直弼は東京都内の菩提寺に眠るが、討ち取られた「首」だけがひそかに水戸に運ばれ埋められた――。古くからある「異説」だが、事件を描いた映画が昨秋公開されたのを機に、埋葬伝説の残る寺を歴史ファンらが訪れている。果たして真相はいかに。

水戸市中心部の住宅街にたたずむ妙雲寺。正門を入ると、「大老井伊掃部頭直弼合靈塔」と刻まれた石碑が目に入る。裏には〈桜田門外の露と消えました大老の御首級を密かにお守りしている……〉。この石碑の下に「埋葬」された経緯が詳しく記されている。

それによると、襲撃に加わった水戸浪士広木松之介が井伊大老の首を持ち帰り、姉が代わって水戸藩主の徳川斉昭に届けた。斉昭は「懇ろにご供養申し上ぐべし」と命じたという。広木家の墓に葬られ、1956（昭和31）年の改葬で、いわれとともに骨つぼが妙雲寺に移された。石碑は68年、水戸藩家老の子孫が建立した。

地元では昔から語り継がれてきた説だが、これまで石碑目当ての参拝者はほとんどなかった。が、昨秋に映画「桜田門外ノ変」が公開されると、県外からも人が訪れるようになった。

「知る人ぞ知る場所だったんですが」。住職の綿引恵一さん(62)は驚く。市内にある映画のロケセット内で、説明員が観光客にこの伝説を紹介したのを機に口コミで広まったようだ。

「信憑性高い」「あり得ない」…真相は？

大老井伊直弼の首の埋葬伝説が残る妙雲寺。この石碑の下に埋められているという＝水戸市見川

真相はどうか。

定説では、攘夷派の水戸浪士ら18人によって切り落とされた首は、井伊家が回収し胴体と縫い合わせたとされる。ただ、権威失墜を恐れた幕府が約2カ月間、事件を公表しなかったため、首は行方不明という風説も立った。

「水戸に運ばれた可能性は低くない」と水戸史学会副会長の久野勝弥さん(73)。国立公文書館所蔵の「安政雑記」には、現場近くの豊後杵築藩邸から事件を目撃した使用人の証言として、井伊を含め3人の首が持ち去られ、うち「誠の首」が行方不明、との記述がある。事件2日後、浪士の一人が「替え玉用の首を用意していた」と評定（裁判）で証言したとの記述も。「事件後まもなく書かれた史料で、記述も詳細。信憑性は高い」と久野さん。

一方、茨城県立歴史館の永井博学芸課長は「伝聞の資料しか残っておらず、言い伝えの域を出ない」との見解だ。井伊の墓がある東京都世田谷区の豪徳寺も「井伊家が別に埋葬することはあり得ない。きちんと当寺に納まっているはずだ」と否定した。

世田谷区教育委員会は昨年1月、修理のために事件後初めて墓を掘り返した。が、棺の中の遺体まで調査する予定はない。調査団長を務めた早稲田大学の谷川章雄教授（近世考古学）は「本格的な調査には大規模な発掘が必要。ご子孫の理解がなければ難しい」と話す。

水戸・妙雲寺の綿引住職は、真相を求める声とは距離を置く。「いずれが真実であるにせよ、代々受け継がれてきた言い伝えを守っていく」。今年も命日にあたる3月3日には、お経を読んで供養した。

子孫、供養に感謝

滋賀県彦根市の井伊家18代当主、井伊岳夫さん(42)は水戸搬送説について「墓を調べたことはなく、真偽のほどは答えようがない」としつつ、こう語った。「事実かどうかよりも、伝説がその地でどんな意味を持つのかが大切だと思う。言い伝えを信じ供養を続けてくれていたことに、ありがとうと言いたい」

（中村真理）